バウハウスあれこれ

お茶の水女子大学名誉教授　田中 辰明

1．バウハウスと ドイツ・ヴェルクブンド

ドイツヴェルクブンドは1907年に設立された。その動機はプロシャ美術工芸学校連盟の支配人であった建築家ヘルマン・ムテジウス(Hermann Mutesius)[1]が行った講演による。ここでムテジウスはドイツの工芸と産業は改革を行わないと衰退の一途をたどると警告を発した。ムテジウスは1896～1903年迄ロンドンのドイツ大使館付となり、大陸のユーゲンドシュティール(Jugendstil)の影響を受けなかった英国の住宅から合理性と単純性を学んだ。ムテジウスは英国の田園都市住宅風の建築をいくつかベルリンに残した、ここでは1907～1908年に建設されたフロイデンベルクの住宅を紹介する(写真1)。

ムテジウスは英国の産業革命で進んだ機械製品の取り入れを推進した。「芸術・産業・工芸・商業・各界のトップクラスの代表者を選び、品質の向上を目指そうとした。当時英国からドイツは英国製品と似たような製品を作るが質が悪いので製品にドイツ製(Made in Germany)と記すように要求されていた。この恥辱を晴らすために、品質の向上を目指して作られたのが「ドイツヴェルクブンド[2]」であった。多くの協会では建築家だけの集まり、経営者だけの集まりといった縦割り組織が殆どである。

写真1　ムテジウス設計(1907～1908)のフロイデンベルクの住宅
(所在地：Potsdammer Chaussee 48,Berlin)

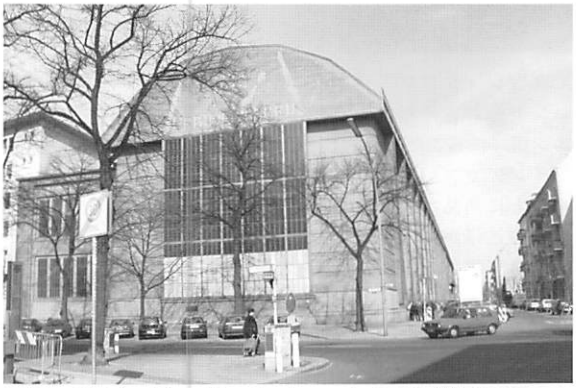


写真2　AEG タービン工場、ペーター・ベーレンス設計 1909
(所在地：Moabit, Huttensiraße Berlin)

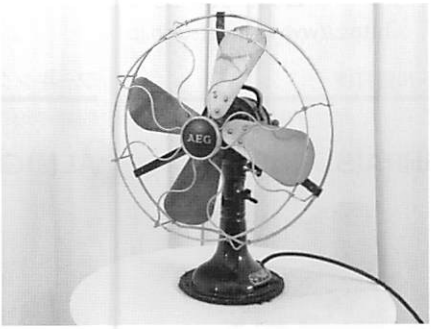


写真3　AEG 社　扇風機　ペーター・ベーレンス設計

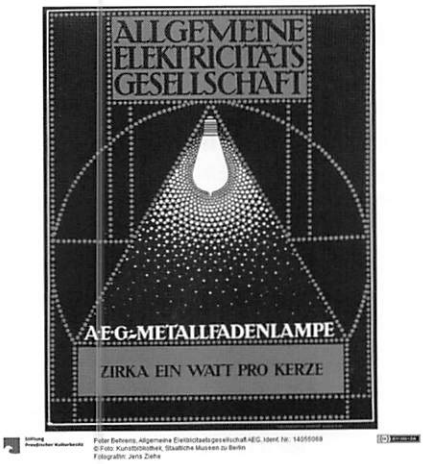


写真4　AEG 社ポスター　ペーター・ベーレンス

ドイツヴェルクブンドは異業種のトップが集まったという点で大きな特徴があった。ドイツヴェルクブンド発足時にはヘルマン・ムテジウス、ペーター・ベーレンス(Peter Behrens)[3]、ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデ(Henry van de Velde)[4]、政治家フリードリッヒ・ナオマン(Friedrich Naumann)らが発起人であった。またAEG社の社長エミール・ラテナウ(Emil Rathenau)、ヴァルター・ラテナウ(Walther Rathenau)はドイツヴェルクブンドに理解を示し、建築家ペーター・ベーレンスを同社顧問として招聘した。そして、タービン工場(写真2)のみならず、同社の製品である扇風機、(写真3)ティーポット、広告ポスター(写真4)の制作をベーレンスに依頼した。工業デザインの始まりであった。

1910年にブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウスがドイツヴェルクブンドに入会し、活躍した。グロピウスがバウハウウス初代校長になるが、バウハウスにドイツヴェルクブンドが多大な影響を与えた。単純化、工業化、大量生産といった思考がバウハウスに入ってきた。しかし1920年代はバウハウスの活動が活発化し、ドイツヴェルクブンドはむしろバウハウスの影響を受けるようになった。ドイツヴェルクブンドが品質の向上を目指したので、Made in Germanyは品質の優れた製品の代名詞になった。

2．バウハウスの発足時の時代背景

町には傷痍軍人、失業者があふれていた。1918年ドイツが思わぬ敗戦をした第一次世界大戦後のベルリンである。時の皇帝ヴィルヘルム2世は同年オランダに亡命し、キールの水兵の反乱によるドイツ革命と共にドイツ帝国は消滅した。ヴァイマール共和国が発足したが、ヴェルサイユ条約により、多額で支払い不能な賠償金が突き付けられていた。激しいインフレも起こり、国民の心は疲弊していた。1919年に発足したヴァイマール共和国は国民に再び希望を抱けるように腐心した。その一つが国立の芸術学校を作り、諸外国から一流の芸術家を集めて教育を行うというものであった。首都ベルリンには皇帝はいなくなったが、戦争を主導した軍部と将校、官僚、皇帝の近衛兵、警察組織は残っていた。これに対応する労働者組織との小競り合い、テロも頻発した。

そこで芸術学校は首都ベルリンではなく、ヴァイマール憲法の草案が練られたヴァイマールに作られた。それがバウハウスであり、校長としてヴァルター・グロピウスが迎えられた。グロピウスはアルフェルドのファーグス靴型工場[文献1](写真5)の実績により、校長に推挙された。

写真5　アルフェルドのファーグス靴型工場　ヴァルター・グロピウス設計

バウハウスの教員として参加したパウル・クレー(Paul Klee、1879-1940、スイス)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer、1888-1943、ドイツ)、ヴァシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky、1866-1944、ロシア)、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger、1871-1956、米国)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン(Johanenes Itten、1888-1967、スイス)、ヨーゼフ・アルバース(Josef Albers、1888-1976、ドイツ)、ラスロ・ナホリ＝ナギ(Laszlo Moholy-Nagy、1895-1946、ハンガリー)、グラフィックデザイナーのヘルベルト・バイヤー(Herbert Bayer、1900-1985、オーストリア)等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとした。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。

これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius, 1883-1969、ドイツ)、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe、ドイツ、1886-1969)で、この2名は近代の4大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハンネス・マイヤー(Hannes Meyer、1889-1954、スイス)[文献2]の影がどうしても薄くなる。しかしハンネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らもベルナウの研修学校(写真6)など素晴らしい作品を

写真６　ベルナウの研修学校　ハンネス・マイヤー設計

写真７　アム・ホルンの実験住宅　ゲオルグ・ムッヘ企画

残した建築家である。

第一次世界大戦は1914年に始まり、４年間に及んだ。ドイツ国民の間には厭戦気分が漂っていた。“インターナショナル”という事が言われるようになった。バウハウスは1925年にヴァイマールからデッサウに移転する。そしてバウハウス叢書第１号を発行する。ここに「国際建築、“International Architecture”」という校長グロピウスの論文が掲載された。これに呼応して日本でも建築家上野伊三郎を会長に1927年に「日本インターナショナル建築会」が結成された。グロピウスは工業技術の進歩が人類の建築の共通点を広げていくと主張した。バウハウスでは沢山の女性も学び、女性が手に職を得た。[文献３)]

徐々にナチスが台頭すると、「ドイツ人でも食えない人がいるのに外人教師に高賃金を支払うバウハウスは國民の敵である」として弾圧されるようになった。結果、バウハウスは1933年に解散し、14年の歴史を閉じた。グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエは米国に亡命し、鉄とガラスの超高層建築を手掛け、それが現在世界の標準となっている。その他工芸品、椅子のデザイン、舞台、絵画、彫刻、芸術の教育法などで、世界に多大な影響を与えた。

初代校長グロピウスは個性豊かな芸術家を取りまとめて大変うまく学校経営を行った。グロピウスはシャロテンブルグ工科大学(現在のベルリン工科大学)を出身し、第一次世界大戦に出兵している。若くして多くの兵士を率い、ここで人心掌握術を学んだようである。ヴァイマールで1923年に、それまでの成果を発表すべく展覧会が開かれた。その一環としてアム・ホルンという場所に実験住宅(写真７、図１)の建設が行われた。これは後世のプレハブ住宅のモデルとして高く評価された。これはゲオルグ・ムッヘが構想をたて、アドルフ・マイヤーが実施設計を行なっている。

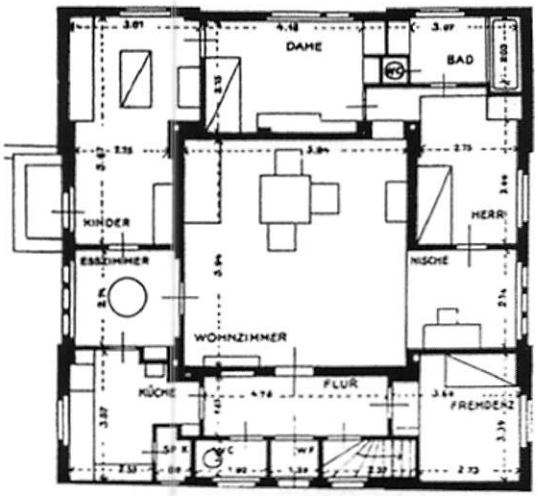


図１　アム・ホルンの実験住宅平面図(企画：ゲオルグ・ムッヘ、実施設計：アドルフ・マイヤー)

ここの子供部屋はアルマ・ブッシャーという女性が設計をしている。それまでドイツ建築の屋根は切妻や寄棟の傾斜があるものが普通であったが、アルマ・ブッシャーはグロピウスに陸屋根の使用を提案している。当時、断熱と防水を同時に行う技術は無く、降雪の多い土地で当然雨漏りが予測された。しかしグロピウスは若き女性建築家の提案を受け入れ、陸屋根を採用した。それ以降バウハウスの建築は陸屋根が採用されるようになった。それまでは屋根は日射熱を遮る日傘と雨をよける雨傘の役割を果たしていた。屋根裏部屋が設けられ、そこで、洗濯物が干された。屋根裏部屋の床で断熱が施されていた。この断熱材は日射や雨水により損傷される事もなかった。グロピウスは当時では陸屋根は雨漏りが発生する可能性は大いにあるが、防水技術者や断熱技術者が必ず、技術開発を行い、問題を解決すると考えて、陸屋根の採

用に至ったのである。提案者ブッシャーにしても、場合によっては受け付けられないであろう提案を受けてもらい、ますますやる気を出して子供の玩具の開発を行った。現在ではどうであろう。我が国ではTQCを異常に長い間、行ってきた。これは日本が成長を止めてしまった30年間と一致する。優秀な現場管理者も書類管理に追われる日々を過ごすようになった。失敗のないことが優先し、思い切った技術開発は行われにくくなった。

1933年にバウハウスが解散すると色彩論を専門としていたヨーゼフ・アルバースは米国の芸術学校、ブラック・マウンテン・カレッジから教授として招聘を受けバウハウスの思想を米国に伝えた。ラスロ・ナホリ＝ナギも米国に渡り、ニュー・バウハウスを設立し、バウハウスの思想を米国に伝えた。またイスラエルからの留学生はテリアビブの町にバウハウス調の白い住宅を建設した。

3．バウハウスとプロテスタント

バウハウスが発足したヴァイマールは、マルチン・ルターが幽閉されながらも保護されギリシャ語の聖書をドイツ語に翻訳したアイゼナッハ(Eisenach)のヴァルトブルグ(Wartburg)(写真８、写真９)から100㎞の距離にある。アイセナッハにはヨハン・セベスチャン・バッハ(1685～1750)の生家がある(写真10)。バッハはドイツの作曲家・オルガニストとして知られる。バロック音楽を集大成した。ライプチッヒのトーマス教会の合唱長を務めた。宗教音楽はプロテスタンティズムに溢れ、プロテスタントの布教に努めた。またバウハウスが1925年に移転したデッサウ(Dessau)はマルチン・ルターが95ケ条の論題を張り出し宗教改革を行ったヴィッテンベルク(Wittenberg)の城の教会(Schloßkirche)(写真11)から30㎞くらいしか離れていない。ヴィッテンベルク(Wittenberg)の町には宗教改革者マルチン・ルターの銅像が建っている。バウハウスはプロテスタントの強い影響を受けて教育を行い、芸術作品の制作を行ったという事が言える。ではプロテスタントの信条とは何か？マルチン・ルター(写真12)の言葉から拾ってみよう。

1．たとえ明日世界が滅亡しようとも、今日私はリンゴの木をうえる。
2．嘘は雪玉のようなもので、長い間ころがせば転がすほど大きくなる。
3．死は人の終末ではない。生涯の完成である。

写真８　アイゼナッハのヴァルトブルグ

写真９　マルチン・ルッターがギリシャ語の聖書を独訳したと伝わるルーターの小部屋

写真 10　ヨハン・セベスチャン・バッハの生家(アイゼナッハ)

4．希望は強い勇気であり、新たな意思である。
5．良い結婚よりも、美しく友情があり魅力的な関係や団体、集まりはない。
6．酒は強い。王は更に強い。女は更に強い。
7．家庭は民族の幸運と不運の原点である。

1．の言葉はパウル・クレーが不治の病に罹り、闘病

写真 11　マルチン・ルッターが 95 ケ条の論題を張り出し、宗教改革を行ったヴィッテンベルグの城の教会

写真 12　ヴィッテンベルグの建つマルチン・ルッターの銅像

生活を送りながらも死の直前まで絵画を描き続けたという点にもあらわれている。

2．の言葉はバウハウスの学校運営は非常に厳しいものがあったが、嘘は存在しなかった。それゆえ、バウハウスは教育の場を変えつつも教員、学生がついてきた。

3．パウル・クレー初め、多くのバウハウスの教員は最後まで芸術作品の完成を求め制作にあたった。

4．ヴァシリー・カンディンスキーはモスクワ大学法学部出身というエリートであったが、芸術を目指して、ミュンヘンにやってきた。第一次世界大戦が勃発すると、敵国人という事で、ドイツに滞在しにくくなり、一旦モスクワに戻っている。しかし終戦になると再び自由のあるドイツに戻って来た。しかしナチスが政権をとると、フランスへ渡っている。大変な目に遭いながらも希望を失わず、絵画の制作をつづけた。

5．と7．は良い家庭を築くことが良い社会を築く原点であることを説いている。バウハウス教員は一概に良い家庭を築いていた。

6．バウハウスでは女性が大活躍をした。女学生は建築や絵画を勉強しようとしても許されず、バウハウス発足2年目に女子部が創設された。女学生は予備教育を終えると女子部に所属させられた。それは織物部で、あたかも織物工場の女工であった。女子学生は来る日も来る日も機織りに専念させられた。これもプロテスタントであるからできたことである。プロテスタントの思想は同じ仕事を毎日やる、大量生産を行うと言った事に向いていた。女子学生は悪い条件でも頑張り、ヨハネス・イッテン、パウル・クレーから予備課程で学んだ知識などを生かし、素晴らしいテキスタイルを生産していった。長くバウハウスでマイスターを務め、学生に多大な影響を与えたパウル・クレーは母親が歌手、父親は音楽教師という家庭に育った。本人も音楽家になるか、画家になるか、迷った時代もあった。事実バイオリンの名手であった。父親の音楽教師というのもプロテスタントの布教に関係していた可能性が高い。クレーもプロテスタンティズムに溢れるバッハの曲を演奏した。

4．バウハウスの建築が我が国に与えた影響

バウハウスの建築が我が国の建築にどのような影響を与えたか？バウハウスの建築を狭義に捉えれば、ヴァルター・グロピウスにより設計されたデッサウの校舎、教師館（マイスターハウス）である（写真13）。直線を使用し、矩形で装飾は無く、ガラスを多用し、陸屋根を採用したものである。このような建築はインターナショナル建築とも呼ばれている。我が国の建築もモダニズムを追求してきたので、このような建築は実に多い。バウハウスに留学し、日本に作品を残した建築家は山脇巌で、氏は東京都中野区に三岸アトリエを設計し、現存している（写真14）。また建築家山口文象は1932年にヴァルター・グロピウスの事務所で働いた。グロピウスは既にバウハウス校長を離職していたが、建築設計の思想は変わらな

写真 13　デッサウのバウハウス教員宿舎(マイスターハウス) この住宅にパウル・クレーとヴァシリー・カンディンスキーが共に住んだ。

写真 14　三岸アトリエ(東京都中野区上鷺宮) 山脇巌設計

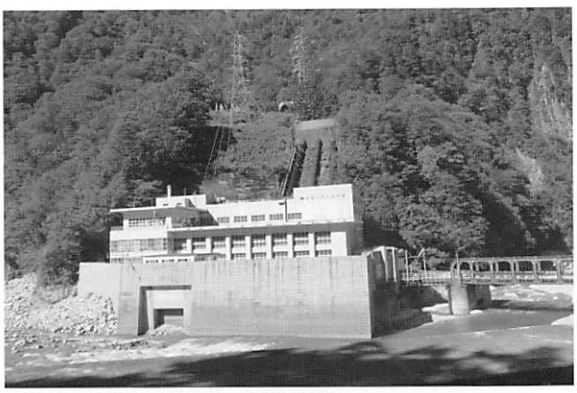


写真 15　黒部第二発電所、山口文象設計

写真 16　旧東京中央郵便局、吉田鐵郎設計

かった。山口文象はグロピウスの思想を日本に持ち帰り、自邸の設計、黒部第二発電所(写真15)の設計を行った。この発電所は装飾を極力省き機能性や合理性を重視したインターナショナルスタイルを取り入れた洗練されたデザインである。建築家土浦亀城が1935年に建設した自邸も箱型、白色塗装、無装飾、陸屋根採用という点でバウハウスの影響を受けた建築と言える。しかし土浦亀城はライトの事務所に留学し、ライトの影響を受けた建築家であった。

バウハウスの影響を受けた建築として吉田鐵郎の旧東京中央郵便局(写真16)をあげたい。バウハウス建築は建物の隅角部を直角で仕上げている。旧東京中央郵便局は隅角部を円弧で仕上げている。しかし、装飾を排除し、ガラスを多用し、単純なデザインとなっている点でバウハウスの影響を受けた建築といる。

バウハウスでは後世の建築に多大な影響を与えた建築がある。1923年にバウハウス発足4年を記念し、ヴァイマールで大規模な展覧会が行われた。ヴァイマールの

写真 17　デッサウの片廊下式集合住宅 (Törten) 1930 年建設所在地: Mittelbreite, Dessau)

アム・ホルンに実験住宅が作られたがこれは後世のプレハブ住宅のモデルになり、多くのプレハブ住宅メーカーによりコピーされた。デッサウのテルテン(Törten)地区に片廊下式の集合住宅4棟が残っている。(写真17)第一次世界大戦は1914年から1918年まで続いた。その間にドイツでは住宅が建設されなかった。1919年ヴァイマー

ル共和国時代に入ってもドイツは政治的にも、経済的にも不安定であった。デッサウでは航空機メーカーのユンカース社など工業がおこり、労働者の住宅が不足していた。この住宅難を解決するためにバウハウスがデッサウに招かれたのであった。そしてグロピウスが労働者の住宅として集合住宅を作った。片廊下式集合住宅はドイツ語でLaubenganghausと呼んでいる。決して上等な集合住宅ではない。家を出ると廊下で他人の家庭内をのぞき込んでしまうという事もあり、ドイツでの評判は決して良くなかった。しかし我が国ではこのタイプの集合住宅が多数建設された。マンションと呼ばれる集合住宅で多数採用された。

本稿の写真2でペーター・ベーレンス設計のAEGタービン工場を紹介した。これは実際には所員であったヴァルター・グロピウスが設計をしたという説もある。従来のドイツ建築は壁が構造体になっていた。AEGタービン工場では構造体は別途鉄骨を使用し、外壁はカーテンウオールになっている。さらに写真5に示したグロピウス設計のアルフェルドのファーグス靴型工場ではガラスを外壁にし、完全なカーテンウオールを完成させている。このカーテンウオールは現在世界の建築の主流になっている。バウハウスが日本のみならず世界の建築に与えた影響の大きさは計り知れないものがある。

5．バウハウスとYouTube

以上解説したようにバウハウスは非常に幅広く、かつ奥行きの深い内容を持っている。なかなか一口で「バウハウスはこういうものであった」と説明するのは難しい。バウハウスには沢山の教員(マイスター)が学生の教育に当たり、自らの芸術作品の制作に励んだ。その教員もバウハウスに学生として在籍していた期間もある。教員の生年、没年、バウハウスに学生として、また教員としての在籍期間を一覧表にして示した(表1)。

筆者は、次のようなバウハウスのYouTubeを作成し、発信している。筆者のホームページ(http://tatsut.org)からアクセスして頂きご覧いただける。表紙の下に「私のYouTube」という項目がある。これをクリックして頂くと閲覧が可能である。

1．バウハウスとパウル・クレー（4編）
2．バウハウスとヴァシリー・カンディンスキー（3編）
3．バウハウスとヨハネス・イッテン
4．バウハウスとヨーゼフ・アルバース
5．バウハウスとグンタ・シュテルツル
6．バウハウスとヘルベルト・バイヤー
7．バウハウスとラスロ・モホリ＝ナギ
8．バウハウスと建築
9．バウハウス㊙女性達
10．バウハウス教員(マイスター)の作品を語る
以上

おわりに

ロシアの侵攻によるウクライナでの戦闘、収まらないコロナ禍により海外渡航は厳しいものになっている。これらが解決したら、是非再度、現在も魅力にあふれるバウハウスの建築群を訪問したいと切に願っている。

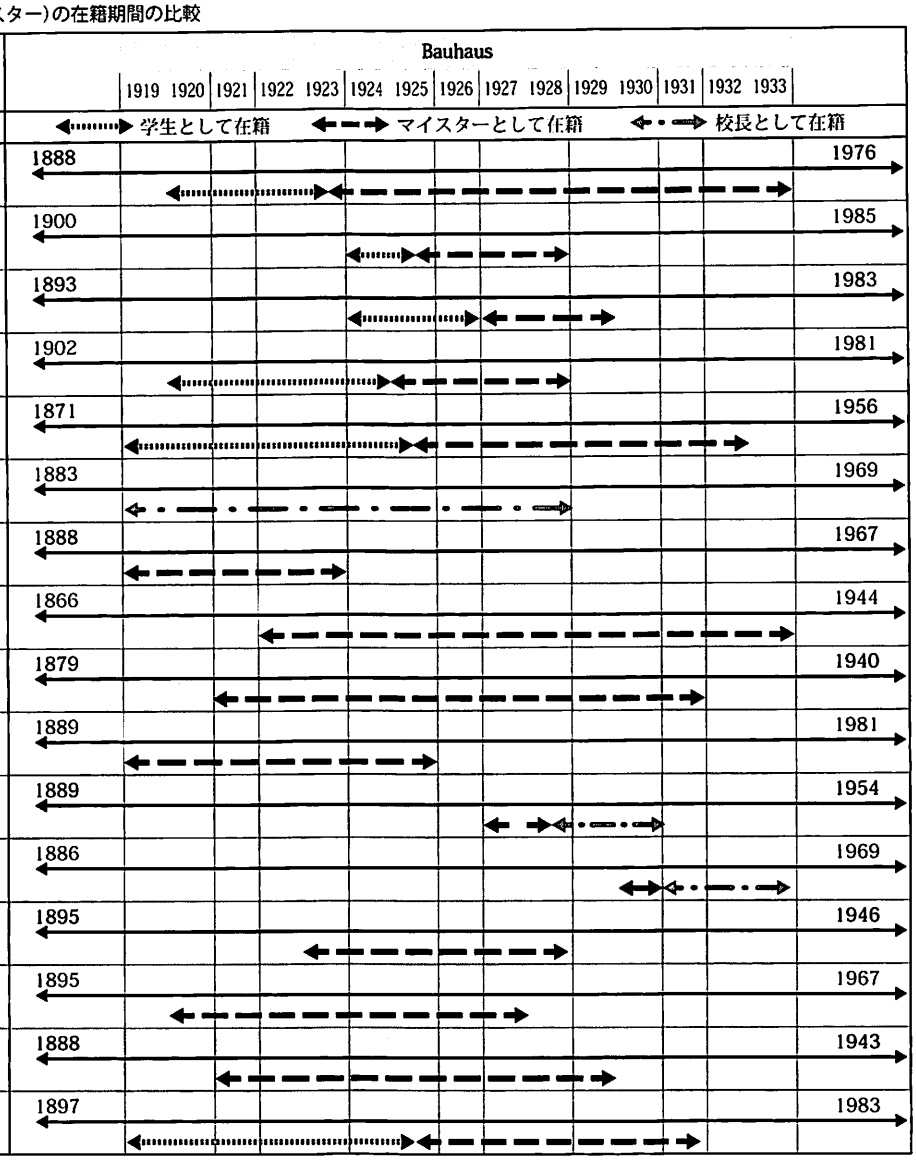
註

1．ヘルマン・ムテジウス(Hermann Mutesius, 1861-1927)
19世紀末から20世紀初頭にドイツで活躍した建築家。ドイツ政府の建築、文化行政官も務めた人物。ドイツヴェルクブンドの創建に貢献し、工業化による規格化を提唱した。大学を卒業したムテジウスは1887年から、日本の法務省建設スタッフとして来日し4年間滞在した。日本の建築に関する著作も発表した。1896年からドイツ大使館付の通商アタッシュとして7年間ロンドンに在住し、英国の住宅、工芸運動を研究した。特にアーツアンドクラフト運動に影響を受け、ドイツに帰国後「近代工芸の意義は、芸術的、文化的、経済的意義として把握されなければいけないと説いた、そして建築家、工芸家、経営者、政治家、職人の団結が必要であるとして、ドイツヴェルクブンドの立ち上げに努力した。芸術と産業の結びつけを行った事は画期的な事であった。

2．ドイツヴェルクブンド(Werkbund)を、我が国では「工作連盟」と呼ぶ人もいる。工作というと政治工作を連想したり、小中学生が夏休みに本立を造ったりする工作を思い出すので「ドイツヴェルクブンド」とした。日本語訳しにくい単語である。

3．ペーター・ベーレンス(Peter Behrens, 1868-1940)
20世紀初頭、第一次世界大戦前間のドイツの指導的建築家、工業デザイナー。デザイン近代化を規格化による機械生産により進める方法を推進した工業デザイン史上の重要人物。青年期にドイツのユーゲンドシュティールに参加して、アーツアンドクラフト運動、ウイリアムモリスの影響を受けた。1899にヘッセン大公エルンスト・ルードヴィッヒが計画したダルムシュタット芸術コロニーに招かれ活動した。1903年にデユッセルドルフ工芸学校校長を務め、1906年ベルリンの大電機製品製造会社であるAEGから製品のデザイン的な処理を委託される。1907年には同社のエミール・ラテナウから同社の顧問に迎えられ、製品のデザイン、広告を委託される。タービン工場の設計を委託され、当時ベーレンスの設計事務所社員であったヴァルター・グロピウスと共に設計に当たった。ここでコンクリート、鉄、ガラスという近代建築の材料を使用し、近代建築の曙と呼ばれる作品を作った。当時のベーレンスの事務所には、ミース・ファン・デル・ローエ、ヴァルター・グロピウス、ル・コルビジェも所員として勤務していた。

表1　バウハウス教員(マイスター)の在籍期間の比較



4．ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデ(Henry van de Velde、1863-1957) ベルギーの出身、父親はパリ・コミューンに参加した革命家であり、死刑判決を受け、ベルギーに亡命していた。ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデは画家を目指してパリにわたり、印象派の絵画家の影響を受けた。ベルギーに帰国し、仲間とアール・アンデ・パンダン(独立芸術)を結成した。1894年から住宅設計を始めた。その後ベルリンにわたり、ザクセン大公ヴィルヘルム・エルンストに招かれた。氏の指示により1902年にヴァイマールに工芸ゼミナールを設立した。これは工芸学校に発展し、1911年、校舎の設計を行った。ドイツヴェルクイブンドの活動にも参加し、中心的メンバーであった。1914年にケルンで開催されたドイツヴェルクブンドの展覧会でヘルマン・ムテジウスと意見の対立があった。ムテジウスは芸術にも機械化、標準化、規格化を取り入れるべきと主張したのに、ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデは作家の芸術性、・個性を尊重すべきと主張した。第一次世界大戦の勃発もあり、1915年にドイツを去った。氏が設計した校舎は1919年に設立されたバウハウスの校舎になった。校長グロピウスは過去を否定したし、単純化、機械化、大量生産、標準化、規格化を主張したので、ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデの思想がバウハウスに影響したとは言い難い。

参考文献

1) 田中辰明　「世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場」月刊建築仕上技術2014年２月号
2) 田中辰明「バウハウス２代目校長ハンネス・マイヤーによるベルリン郊外ベルナウの「同盟研修学校(Bundesschule, Bernau)」月刊建築仕上技術2019年３月号
3) 田中辰明　「バウハウスと女性たち」婦人之友2020年３月号
4) 田中辰明　「ハインリッヒ・チレが描いた労働者階級のベルリン近代史－ヒトラー出現まで」１巻、２巻アマゾンより電子出版